

やさしい育成技術

子馬の管理方法 ～ 1歳セリに向けての準備 その1 手入れ～

日本中央競馬会 日高育成牧場 専門役 頃末 憲治

はじめに

前号では、当歳時の体力養成に最も影響を及ぼす子馬の放牧、および子馬にとって大きなストレスとなる離乳について説明しました。今号では、日常の手入れからトリミングまで、1歳セリに向けての準備について説明します。近年、セリに向けての準備は、主にセリ専門業者であるコンサイナーによって行われています。しかしながら、日頃からセリに上場するために必要なことを理解し、さらに意識し続けることによって、多くの人がセリに向けての準備を行うことができると思われますので、ご一読いただければ、幸いです。

セリで購買者が着目するポイント

全ての購買者は、セリで購買する際には、購買馬の競走馬としての活躍を期待しています。そのために、血統、馬格、および肢勢(コンフォメーション)はもちろんのこと、展示でのトリミング、手入れの状態、馬体、および常歩運動も含めて、全てに着目し、是非とも手に入れたと思う馬を探しています。

セリへ上場するにあたり、血統および馬格は変えることができません。また、肢勢については、出生直後から注意深く観察し、適期に装蹄師あるいは獣医師による処置を受けることによって、変えることができる部分もあります。数ヶ月間かけて行う肢勢矯正は、そのひとつです(図1)。



図1 肢勢の矯正(肢勢は早期ケアで矯正できることがあります)

一方、人が手を加えることによって、変えられる部分もあります。それは、適切な運動や栄養管理によって馬体を仕上げることで、トリミング(自然の状態では伸びている毛を抜いたり、カットして馬の身だしなみを整えること)によって身だしなみを整えること、さらには、適切にしつけを行い、引き馬実施時に快活で力強い常歩で歩かせることです。このように、十分に手をかけること、さら

には、展示用の頭絡を装着することによって、同じ馬でも見違えるほど良くみえるようになります。トリミング前後の比較を行うと、その差は歴然になります（図2）。

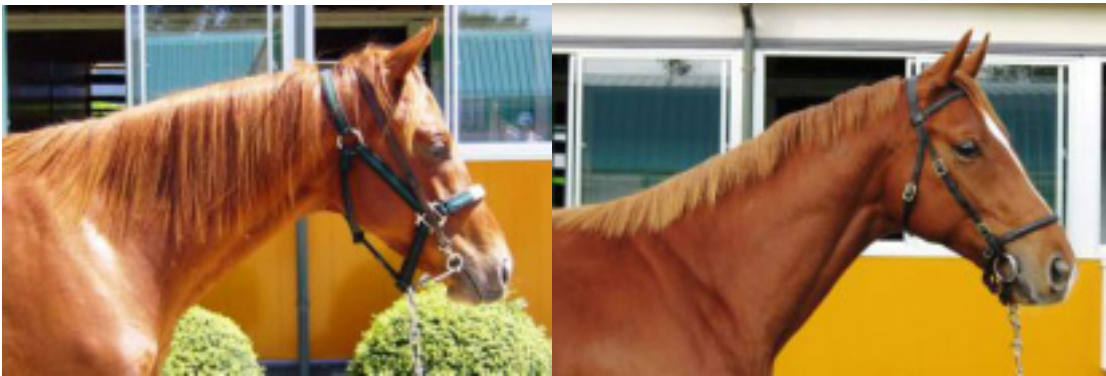


図2 トリミング前（左）とトリミング後（右）

手入れの仕方

1．手入れ馴致

日常の管理で、馬が静止してブラッシングを楽しめるように手入れを行います。肢挙げは、馬のバランスが崩れるため、すぐに受け入れない場合もあるため、気長に繰り返し慣らしていきます。裏掘りに慣れたらテップで蹄を軽く叩き、装蹄時の釘打ちに馴らします。前肢で馴れたら後肢も同じように行い、最終的には右側の肢を左側からも挙げられるように馴致します。四肢の蹄鉄装着を念頭に、少しずつ馬の不安感を取り除くようにしなければなりません。

手入れに慣らすポイントは、急に強引に行うことなく、気長に反復して行うことです。

2．基本的な手入れの順序

- 1) 各種ブラシ（ゴム、根、金ブラシなど）を用いて、換毛する被毛を抜くとともに、皮膚にこびり付いたホコリや垢を浮き立たせて、汚れを落とします。少量のシャンプーを混合した温湯に浸したタオルやスポンジを用いて、浮き上がった汚れを丁寧に拭き取ります。
- 2) ブラッシングは、毛並みを整えて毛艶を出すとともに、皮膚の血行を良くする効果があります。毛ブラシでブラッシングしたあと、乾いたタオルでマッサージを行います。
- 3) タテガミは、水ブラシを用いて、右側に寝かせます。尾は櫛が通りにくい場合には切れるため、最初は手でほぐし、その後櫛をいれます。
- 4) 蹄の裏掘りを行い、蹄底および蹄壁に蹄油を塗ります。

3．ブラッシングについて

哺乳動物に生えている体毛は一定方向に向かって生えており、この毛の流れを毛流と呼んでいます。馬の被毛は全身に密生しており、短くて細い夏毛は、秋季から冬季にかけて寒冷にも耐えられるように冬毛になりますが、冬毛は光沢を失い、春になって脱落し、毛足が短く太い夏毛に生え替わります。冬毛よりやや太めの夏毛は、年間を通じて適宜抜け換わります。このように、毛が脱け換わることを換毛と呼んでいます。通常、馬の場合、一年に2回脱換します。換毛の遅速は、健康状態と密接に関係し、栄養状態が良く健康な馬は、換毛が早いといわれています。

毛流の方向は、冬毛でも夏毛でも変わりません。馬の毛流は、原則として背側から腹側に向かっています。馬は、比較的短いサイクルで換毛するために、頻繁にブラッシング、および手入れする

必要があります。馬のブラッシングのポイントは、ブラシを毛流に沿って動かすことです。毛流に逆らってブラッシングを行うと、逆毛が立ってしまいます。

馬の皮膚を一定期間寒さにさらすと、その反応として冬毛が生え始めます。逆に、馬体を保温すれば、冬毛を生えにくくさせることができます。サラブレッドの皮膚は非常に薄く、良くブラッシングすると毛足は短くなり、光沢を持ちます。冬毛を伸ばさないためには、秋期から冬期間は、保温を目的として、馬服を着用します。冬毛が伸びていないということは、それだけ馬に手をかけている証拠ともいえ、馬の価値を上げることに結びつきます。

4．馬房内での馬のつなぎ方（タイチェーンの使用）

馬房内で馬の手入れ、あるいはトリミングを行う場合には、馬は出入り口の方ではなく壁に向かってつなぎます。最初は引き綱を環に結ばないで通すだけにして、その端を手で持って馬が動いてもフレキシブルに対応できるようにして、手入れを行います。馬がリラックスし、この状態に馴れたらタイチェーン（図3：ナイロン紐とチェーンをビニールで被覆し、両端にナス環を装着）を用いると良いでしょう。

タイチェーンの一方の断端には、ヒモなどの切れやすい素材を用いることによって、馬が突然強く引いた場合でもヒモの部分が切れ、外傷や馬具の破損を防止できます。

馬を出入り口とは反対の壁に向かってつなぐ理由は、出入り口に向けてつないだ場合には、馬は出口に向かって出ようとするからです。さらに、出入り口とは反対の壁に向かってつなぐことによって、後方から近づいても、蹴らないマナーを身に付けさせることが可能となります。

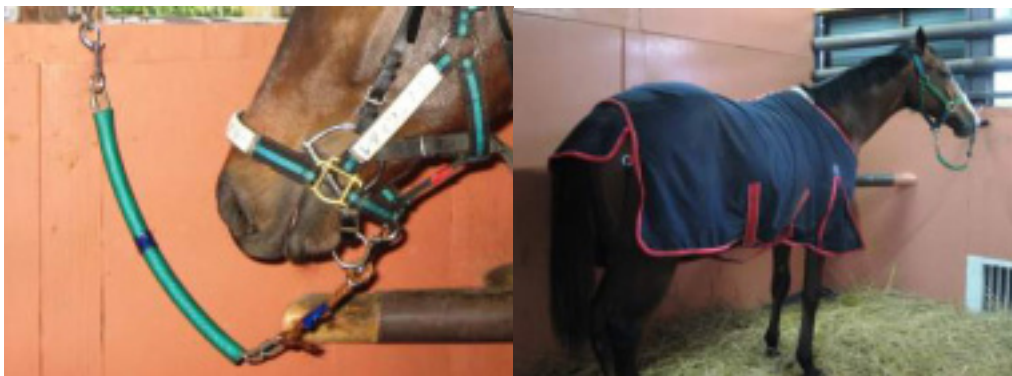


図3 タイチェーンによるつなぎ方（出入り口とは反対側の壁につなぎます）

トリミング

トリミングとは、自然の状態で伸びている毛をカットしたり抜いたりして、馬の身だしなみを整えることです。トリミングを実施することによって、購買者に素軽い印象を与えることができます。

1．タテガミ

タテガミは、ハサミで切ると切り口が明瞭となり、不自然に見えるので、切らずに長く延びた毛をつかんで、手で下に引っ張って、根元から抜きます（図4）。タテガミは、ある程度の長さで均一にそろえるのが一般的です（図5）。また、頸のラインは、馬の第一印象に大きな影響を与えることから、タテガミは必ず右側に寝かせます。そのため、展示日に備えて、癖毛の場合には三つ編みなどにより右側に寝る癖をつけなければなりません。

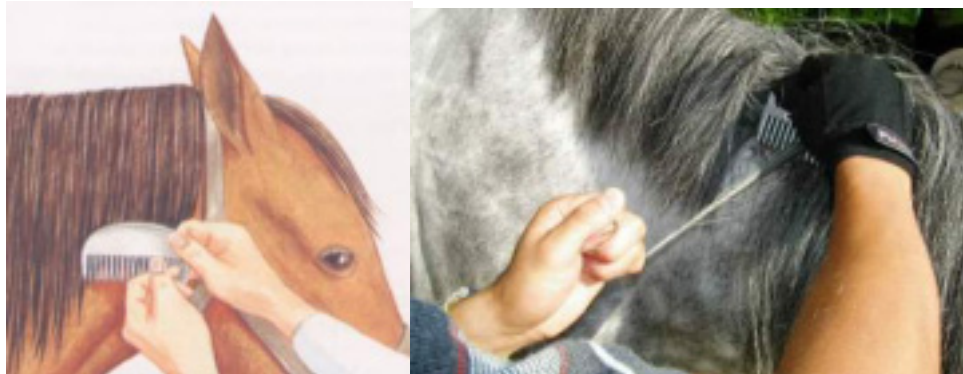


図4 タテガミは長い部分を抜いて長さをそろえます。

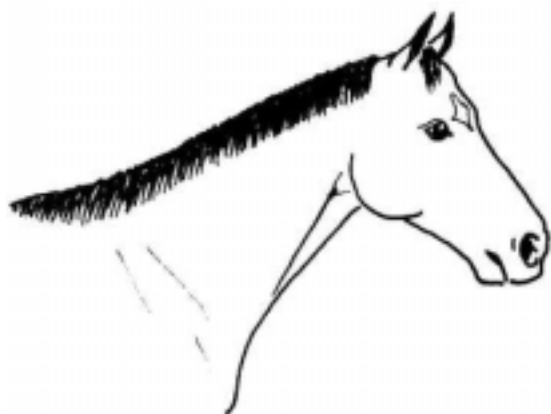


図5 タテガミのトリミングはある程度の長さで均一に揃えるのが一般的です。

2．前髪

前髪の多い馬は、タテガミのトリミングと同様に、長く延びた毛をつかんで、手で下に引っ張って根元から抜きます。この際には、前髪の長さを均一にそろえずに、中央を最も長くし、扇状のように整えます。前髪のトリミングのポイントは、短くしすぎないことです。

3．ブライドルパース（頭絡の通り道）

頭絡のうなじ革が通る部分は、ブライドルパース（頭絡の通り道）と呼ばれます。この部分のタテガミを、通常 5cm 程度切ることによって、手入れが容易となり、頭部が軽くスッキリ見えるようになります（図 6）。



図 6 ブライドルパースのカット方法（左）およびカット後（右）

4．耳の毛・顎ひげ・口ひげ

耳の毛は、手のひらで耳を軽く包み込んで、そこから飛び出た毛を、歯が湾曲した毛刈バサミではなく普通の紙切りバサミを使用して、ハサミの刃全体で直線的にカットします。この際、耳を強く持ち過ぎると、毛が不規則に飛び出し、仕上がりが不揃いになり、また、刃先のみで細かく切り足すと、切り口が不整になってしまうので注意が必要です。耳の毛をカットすることによって、馬の顔が引き締まり、精悍に見えるようになります（図 7）。

顎ひげおよび口ひげは、毛の生えている方向に逆らうように、ハサミで前方から後方に向けてカットします。



図 7 耳毛は手のひらで耳を軽く包み込んで、そこから飛び出た毛をカットします。

5．距毛・尾

距毛は、長すぎると馬が重く見えるために、付け根近くで切りそろえます。これによって、肢がすっきり見え、脚の動きが軽快に映ります（図8）。

尾は、先端から約 5～6cm 程度の部位で切り揃えると、尾の毛の量が多く見えるようになります（図9）。



図8 距毛は付け根近くで切りそろえます。



図9 尾は先端から約 5～6cm 程度の部位で切りそろえます。

6．トリミング時の保定

手入れや各種処置を行う場合、人馬の安全のため、しばしば鼻捻子が用いられます。鼻捻子は、効果が高い反面、長時間に及ぶと暴れて危険なこともあります。

基本的にトリミング自体は、馬に疼痛を与えませんので、手で鼻先をつかむことにより、容易に馬を落ち着かせることができます。鼻先をつかんだら、馬の目が“ トロン ”とし、力が抜けるまで、約十数秒間待ってから各種処置を開始します。この際に、大人しければつかんでいる手の力を緩め、反対に動きそうになれば強く握ります。鼻先のつかみ方は、表面を握るのではなく、上唇の内側に親指を入れて握ると、はずれにくく、力を入りやすくなります（図 10）。最初は嫌がる馬も、これを繰り返すことで、次第に慣れてきます。



図 10 トリミングは痛みを伴わないので、手で鼻をつかむことによって保定します。

鼻先のつかみ方は、表面を握るのではなく（左）、上唇の内側に親指を入れて握ります（右）。